

覚超観心説の諸相

窪田哲正

一 問題の所在

本稿では、都率覚超（九五二〜一〇三四）の作とされる種々の観心義文献を検討する。これら諸書の観心説を、観心の対境についての論、つまり観境説のちがいから分類すると（Ⅰ）天台伝統的観心説「第六識妄心観説」、（Ⅱ）〈生死最初心、元初一念〉観心説「第八識無明観説」、（Ⅲ）〈実相・理〉観心説「真心観説」、（Ⅳ）独特の口伝法門、の四つに大分できる。この分類により、覚超作とされる諸書を、はじめに真偽未決書、次に確実な著作、の順に検討し、彼の観心説とされる諸説の実態を考えてみたい。

二 覚超、真偽未決書における観心説

（Ⅰ）天台伝統的観心説

A 『円融仏意集』（仏全三四所収）

この書では「円融者大覚之心源也。…観二介爾一念之心即

空即仮即中」也」といい、「介爾一念の心」において三諦円融を観ずるところを「大覚之心源」と説くが、この観心説は『摩訶止観』の説に忠実な立場である。

（Ⅱ）〈生死最初心・元初一念〉観心説

B 『観一念抄』（観一念心）叡山文庫蔵^①

この書では天台疏釈中の「一念無明」の語を集録し、観心の対境としての一念心（「一念無明」）を「仁王経、起信論等所説の生死最初一念に同じ」と示す。『止観』五の一念三千を明かす段の一念は、伝統的には凡夫現前の日常心の一念（証真いう「根塵相對一念」）だとされるのであるが、『観一念抄』はこれを「生死最初一念」だとするのである。

C 『私用心・私案』（金沢文庫蔵^②）

覚超の撰号を持つ金沢文庫蔵本『私用心』には「私案」に始まる本文と別の一段（叡山文庫本、京大本には無し）がある。いま仮にその部分を「私案」と呼ぶが、その中に

以「無始最初一念為根本無明」。凡一切世間界善惡諸法從「彼一念無明」而生。是諸法之本也。故以諸法「撰」彼一念、以此為「顯密行者所觀不思議境」。

といい、「無始最初一念」（頼耶一念）を觀境と示す一節がある。

D 『一念頌決』（仏全二四所収）

右の生死最初一念觀説を發展させた内容を説くのが『一念頌決』である。本書では「元初一念者第八識也。此識起妄本覺理」。故迷云識也。迷者眼心也。故此識云三元品無明。」と示すごとく、生死最初心を元初一念と呼び、それを第八識、阿頼耶識、また元品無明だとする。この書の意が元初一念觀にあつたことは後の恵心流の『天台直雜』が「都率先徳、覺大師、『一念頌決』趣、迷心最初觀第八識可云」（天全一七・三〇下）と指摘するのとおりである。

(Ⅲ) 〈実相・理〉観心説

E 『実相義問答・別記』（仏全二四所収）

この書の前半は衆生心に三諦を觀することを説くので、観心説としては(Ⅰ)にいれるべき内容である。ところがその後半の「別記」の部分では、「事惣体というは一念無明なり、理惣体というは一念無明の性なり」といい、その性を法性、実相、中道、第一義諦等と名づけると説き、理の立場が強調

されてくる。そしてこれをうけた觀心のありかたを行者須觀、即「法性之無明」、顯、即「無明之法性」也。成仏之要、只在於斯而已。

と示す。この文を『天台直雜』（天全一七・二九下）は妄心觀説の「根拠とするが、しかしこの「別記」の本旨は三諦の理の強調であつて、その末段に

初心觀、只応念二実絶待之理。故云但信「法性」不信「其諸」云々。というのをこの書の観心説と見なすべきである。この「絶待之理」を念ずるとは実相・理觀すなわち真心觀説である。また引用された「但信「法性」不信「其諸」」の文はいうまでもなく、趙宋天台山外派が真心觀説の根拠としたものであり、本書はその影響を受けている可能性もある。

F 『私用心』（金沢文庫蔵）

前出のCの本文では「起信論」の「阿頼耶一念」の性を問題とし、「実相觀」の究極的立場として「今、諸法を会して一心の性に入れ、もつて一理となす。その一理の上に三義を分別するなり。是を不思議一心三諦と名づく」と説く。これは後の尊舜（『止觀見聞添註』）いうところの都卒の「五重簡境用觀」説の第五重の義にあたるものであり、覚超が觀真説(3) だったとする根拠とされるものである。

(Ⅳ) 独特の口伝法門

G 『已心中記』(仏全二四所収)

この書では、道場の東西に明鏡二面を相對させて掛け、その中間に行者が坐す一連の作法を一念三千觀とする。

以上、覚超作と伝えられる諸文献を概観したが、伝統説要約の(一)と、他の資料と論旨を大きく異にする点で後世の口伝文献と考えられる(IV)とを除くと、(II)の(生死最初心・元初一念)觀心説と、(III)の(実相・理)觀心説とが覚超によつて主張されたということになる。このためこれら二説の中、いずれが覚超説かということが後世議論となつた(『止觀見聞添註』五之一参照)。

三 確実な覚超文献における觀心説

次に覚超の確実な三つの文献を取り上げ、年代順に検討する。

H 『五相成身私記』長和二年(一〇一三、五十四才)撰

本書は密教の修行である五相成身觀・月輪觀の觀法を説くものであるが、その月輪觀は天台の觀心でいえば「中道実相理」を觀することに等しいとする。故に月輪觀の本意はこの理をきわめることにあるとされる。このことは次の

問、觀_レ月觀_レ理何故不同。答、意在觀_レ理。難_レ解故喻_レ月(中略)

問、此中所_レ觀は何理耶。答、以_レ義推_レ之、応_レ觀_レ不思議中道実相理也。

との問答に示されている。また『經』、『軌』の説を踏まえ月輪は有為諸法を生み出す阿頼耶識を喩えたものでもあるといひ、その本性浄なるを觀するべきことが示される。この説を前の(一)〜(III)の分類に対応させて考えてみるに、觀心の実修の場面での月輪は『經』、『軌』にいう「在輕霧中」のものであり、「有漏」位の阿頼耶識である。この点からいえばひとまず前の(II)に当たるといえるかも知れぬ。しかし本書はそれにもまして心月輪、阿頼耶識の本来清浄なることを強調するのであり、筆者はこのことから本書は(III)の立場にいれるべきと考える。

I 『六即義詮要記』寛仁四年(一〇二〇、六十一才)再治⁽⁶⁾

本書(覚超再治箇所)は天台止觀の実践理論に『起信論』説を導入するものであり、特色あるものである。例えば『起信論』の阿梨耶識に關連して次のようにいう。

問、若爾今言「一心心即如来藏理」、指_レ彼梨耶之一念_レ歟。答、総而_レ言_レ之、方法非_レ無_レ如来藏理。取_レ要言_レ之、応_レ觀_レ無始梨耶一念。問、有何証_レ立_レ此義_レ耶。答、既依_レ藏識_レ明_レ別_レ円_レ教_レ、豈不_レ依_レ所_レ依_レ識_レ為_レ觀_レ心_レ之_レ要_レ耶。止五云、若欲_レ觀_レ察_レ須_レ伐_レ其_レ根_レ(中略)今当_レ去_レ丈_レ就_レ尺_レ去_レ尺_レ就_レ寸。置_レ色_レ等_レ四_レ陰_レ但_レ觀_レ識_レ陰_レ矣。私云、若爾_レ応_レ去_レ寸_レ就_レ分_レ置_レ七_レ識_レ先_レ觀_レ本_レ識_レ。此義_レ至_レ要_レ。

これはきわめて大胆な主張である。『止觀』では「去_レ丈_レ就_レ尺去_レ尺_レ就_レ寸」といひ、三科簡境して五陰中の識陰を觀ぜよ

というのに、本書ではさらに「去」寸就分」として「本識」、「無始梨耶一念」を観すべきとする。すなわち『起信論』にいう真妄和合の阿梨耶識・梨耶一念を観心の対象とせよというのである。ところで考えるべきは、この梨耶一念は本書においては真妄いずれの義を主とするものであるかということである。後の飯室の静算には「梨耶一念無明妄心」の語があるが、しかし本書はこの阿梨耶識の眞の面は、天台にいう「如来藏理」と一致することを強調するのである。すなわちそれは、日常心の根底の如来藏理を見ることをいうのであり、この説は観眞義に傾斜した第八識観説と見なせる。故に本書の説は、前の分類では右のH書に同じく(Ⅲ)に含むべきものと考ええる。

J 『三観義私記』長元五年(二〇三二、七十三才) 撰

本書は『摩訶止観』卷三に拠るとして、從仮入空観、從空入仮観、中道第一義諦観の三観の意義について、多くの経論、疏を引いて、広く論じたものであるが、その内容は伝統的天台止観法門の祖述であり、密教義や、『起信論』説に關説することもない。例えば止観における「一念」を問題として「問、約「円頓観」、一念云何具「百界千如三千世界」耶」との問いをたてるが、その答文は十界互具百界千如の公式論的説明以上に一步も出ない。故にこの書の観心説は前の分類の(Ⅰ)の天台伝統的観心説を説くものといえる。

四 小結

右の検討の結果、覚超の確実な文献には、(Ⅰ)の天台伝統的観心説と、(Ⅲ)の〈実相・相〉観心説とがあり、覚超の強調するところは(Ⅲ)にあるということが知られた。しかるに、後世大いに覚超義として語られた、真偽未決書にある(Ⅱ)の〈生死最初心・元初一念〉観心説は、確実な文献では見当たらない。Hの『六即義詮要記』の「梨耶一念」観説はこれに近いが、これは(Ⅲ)に入れるべきことはすでに述べた。そこで真偽未決の(Ⅱ)の系統の諸書について考えるに、これらは要するに『起信論』にいう「無始無明」を止観の対境とすべきとの主張である。覚超が『起信論』説と観心義との関連を考究していたことは『六即義詮要記』の二年前の『仁王護国鈔』の記述からも確かであるが、しかし筆者は上来の諸書の検討から、(Ⅱ)の系統の諸書を覚超の撰述とすることには疑問をもつ。それらの諸書の成立については、次のように考える。すなわち覚超の『起信論』説着眼に刺激され、その門下や門派の人々の間で止観法門における『起信論』説位置づけをめぐり、活発な議論がなされ、種々の見解が生み出された。そしてそれらの諸説が覚超に仮託され、その意を述べるものとして作られていったのではないかと。また(Ⅲ)系統の真偽未決のFも、これも『起信論』の一念の

理を問題とするのであり同じ事情の下に成立したと考える。

- 1 拙稿「都率覚超の観心義―『観一念抄』をめぐる―」（印仏研四五―）参照。拙稿発表後、大久保良順「日本天台恵心流七箇大事の心境義について」（大正大研究紀要六一）に「観一念抄」の言及がなされ、さらにこの論をうけての弘海高頭「観一念抄」における「一念心」（天台学报一九）、同「日本天台における、介爾一念と元初一念について」（多田厚隆先生頌寿記念論集『天台教学の研究』所収）等の論考があることを知った。彼此対照するに拙稿の不足の点、また弘海氏の研究と重複してしまった内容もあつたが、見解を異にする点もあるので参照されたい。
- 2 『私用心』については近刊の「大崎学报」一五六号の小論「覚超撰とされる観心義文献『私用心』について」を参照。
- 3 このことについては前注2拙稿でふれた。また「五重簡境用観」説については仏全二九・三五〇以下参照。
- 4 『已心中記』を花野充昭「日本中古天台文献の考察（3）」（印仏研二六二―）は覚超親撰と見るが、今はこの説をとらない。
- 5 『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』（大正一八・三一―三三下）、『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』（大正一八・三〇二上）等参照。

- 6 佐藤哲英「二六即義私記の研究」（龍谷大学学报三二七）参照
前注1『多田論集』弘海論文参照。

- 7 『仁王』諸注、『瓔珞』、『維摩疏』等を踏まえての「私云以此等文、可尋初一念識元品無明無住本等之差」。観心之要只於只在於斯」（仏全六・一五四）との注文の解釈が重要となる。
- 筆者はこの文の直前に引く『維摩疏』が、無明と法性の関係に

ついでに別円面教のちがいを示すものなのでここでは「初一念識」の説は別教義と見なされていると考える。すなわち『起信論』的生死最初心観心説を天台の観心義と同致とするのではなくと理解する。

9 前注1拙稿ではB『観一念抄』を一応覚超作として扱ったが、今はこれを疑う。この書の撰述意図についてはなお考究すべきである。

（キーワード） 覚超、天台止観、元初一念

（顕本法華宗教学研究所員）